

## 第 59 回(2011.10. 13 配信)

## 雲竹齋先生の歴史文化講座－「中東・アラブ社会 (7)」

## 神から授かった神聖な言葉(アラビア語)

アラブ人たちは、アラビア語はアッラーから授かった神聖な言葉だと言うが、その根拠は、アラビア語はアッラーが天使ジブリール(大天使ガブリエル)を通じて啓示を下した言葉だからである。したがって、イスラム教を信仰する者は必然的に『コーラン』に書かれたアラビア語を学ぶわけで、そのアラビア語の文章は自分が造る言葉ではないから、暗記力が必要となる。そういった理由もあって、アラブの学校では、学科にもよるが、一般的には記述より暗記の方が重視されるから、試験間近になると、野原や道を行き来しながら、大声で文章を暗記している学生をよく見かける。

アラビア文字の起源はフェニキア文字だという。約 3000 年前に海洋商人として有名なフェニキア人が、その必然性から編み出したフェニキア文字は、やがてギリシャ文字となりラテン文字、英語のアルファベットにつながるが、このアラビア語がいつごろ発明されたのか不明である。アラビア語は、預言者ムハンマドが生まれる前からあったことは確かだが、その頃はほとんど一般的に用いられていたとは思えない。ムハンマドが神から授けられたとされてから、急激に広まったのであろう。一説によれば、イスラム教が布教される以前のアラビア半島では、南アラビア族と北アラビア族とが激しい対立・抗争を繰り返していた時代だった。この部族間抗争の時代は、まさに英雄誕生の時代でもあり、これら英雄を称える詩が流行し、方言を越えた共通語としてのアラビア語が誕生して、「アラブ人」という民族意識が生まれるようになったという。

アラビア語は、『コーラン』に記載された内容を正確に把握する必要から、文法や辞典が多く編纂され古典の研究がなされ、同時に科学や医学などの研究が進んだ。他方、現在のイランを中心とする地方では、9 世紀にはいるとペルシャ語による文芸復興運動がおきて、それまでのアラビア語からペルシャ語による文学が盛んになった。これらの文化が、東西の文化に及ぼした影響は非常に大きいものがあり、ペルシャ(イラン)からシルクロードを通して、最も東の日本まで多くの文化が伝わってきた。そこで多くの文化は、アラビア語ではなくペルシャ語になって日本に伝わってきたのである。バザール、キャラバン、チャドルなど、みんなペルシャ語だが、それでもアルコールとかアルカリなどのように、アラビア語のまま日本に伝わってきた言葉もある。それらは、アラビア語のままペルシャから陸路伝わった言葉もあっただろうが、多くはヨーロッパに入ってから日本に伝わったのだらうと思われる。

アラビア語には、『コーラン』に記述された言語であるフスハ(正則語)と、アーンミーヤ(方言)とがあつて、このフスハを話したり読み書きしたりすることが出来る人は少ない。いわばエリートである。このフスハは、言ってみれば共通語だが、イスラム教が非常に早い速度で広がったのに対し、その地方の文化や言語までも急速に同化されて行った訳ではない。地方の言語がアラビア語に同化されて行くには、相当な時間がかかったに違いなく、その過程で同じアラビア語でも地域によってかなり変化したものになったに違いない。従って、フスハは共通語とはいふものの、イスラム教徒の一般社会で通用するものではない。アラブの国々ではその国の方言でなければ一般には通用しないとされた方がいい。

この様に、同じアラビア語でありながら、話し言葉は地方によって言葉が異なるのでややこしいのだが、しかも悪いことにはお互いに自分たちの方言が正しくて美しいと信じているので困る。同じアラブ人旅行者でも、自分の国の方言を使えばバカにされて軽んじられるから、国が違えばアラビア語を使わないという者もいるようである。

小学校に入ると、『コーラン』を徹底的に覚えさせられるが、コーランなどの書き物は正則語だし、またイスラムの統一や復興主義の台頭などで、正則語の教育が進んでいる。早い話が、東北の人も九州の人も教科書は同じものを使い、同じ読み方をしているのに、会話となると方言の方が通じやすいと同じなのである。しかし、彼らにすればアラビア語はアッラーから賜った言葉であるという意識から、言葉を非常に大切にすあまり、自分の言葉に酔ってしまう性格があるようで、その言葉による表現を重視するあまり、誇張的になり、強制的になって何度も同じ言葉を繰り返す。あの破裂音というか喉の奥で詰まったような、口の中で爆発するような発音で喋られると、唾が飛んで来そうでもどうしても逃げ腰にならざるを得ない。すると相手はより一層顔を近づけて喋りまくる。しかも大袈裟なジェスチャーで、である。もっとも、大きなジェスチャーで顔を近づけて喋るのは、相手に敵意を持たない、という意志を表しているアラブ人の考え方に起因しているというが、あまり有り難くない習慣である。

### 《閑話》 アラビア数字はアラビア文字ではない

友人たちにアラビア語で書かれた本やパンフレットを見せると、「数字が書いてない。おかしいではないか」という者が多い。数字の書いてあるところを指さしてやると「これは数字ではない」と言う。だから「これがアラビアの数字なんだ」と言ってやると不思議な顔をする。

我々が日常使っている数字を「アラビア数字」と呼んでいる。そこで、このようにアラビア数字はアラブ文化が発明したものだと思っている人が多い。しかし、アラビア数字はインドで発明されたものである。数学は8世紀にインドから中東に入って、イスラム文化の下で発達し、12世紀になってヨーロッパに伝わった。アラビア語の数字とは書き方が違っており、アラブ社会では「インド数字」といって区別している。だから、アラブ人が使っている数字の書き方は全く違っているのだが、友人たちは「そうか！日本語でいう漢用数字に相当するものか」などとわかったようなことを言う。これ以上説明すると、頭の弱いわが友人たちの脳が爆発するので、「まあ、そんなものだ」と言ってやることにしている。

また、「アラビア語にも習字があるんだ」と言うとおどろく者も多い。習字は漢字だけのものと思っているようだ。しかし、ドイツ語やフランス語などでも「飾り文字」があるが、美しい文字を書こうとするのは世界共通の意識であり、アラビア語も例外ではない。わが国でも漢字の書体に色々あるように、アラビア文字にもクーフィー体、ナスヒー体、スルシー体など、幾つかの書き方がある。

なお、アラビア文字は右から左へと書くのが特徴だが、数字は逆に左から右に書く。一般の人たちは数字の読み方を1の位と10の位を逆さに書く。たとえば2345は2千3百まで書いて次に少し空けて5を書いて空いているところに4を書くことが多い。理由は雲竹斎も知らない。アラブ人に聞いても、「そういう書き方を教わった」と言うばかりである。だから、友人たちにはこの書き方は言わない。言えば必ず理由を聞かれるので、もしも正直に一度でも「知らない」と言えば、猜疑心の強い彼らは今後一切信じてくれないに決まっているからだ。

友人たちは、雲竹斎はアラビア語が堪能だと思っている。「おまえは中東のあっちこっちに行ったよだから、アラビア語は当然喋れるのだろうな」と言う。たしかにいくつかの国に駐在し、また中東各地に調査・視察のため出張もしたから、そう思われるのは当然だろう。しかし、アラビア語で会話する機会はほとんどなかった。業務上は英語かフランス語なので、本当はあまりしゃべれない。少しは覚えても、アラビア語は地方によってまったくといっていいほど違うので、よその国では使えない。したがって、外交団は英語かフランス語で会話する。しかし、本当のことを言っても信用しないだろうし、仮に信じたとしても友人たちは詭弁だとか弁解だといって軽蔑するに違いなく、今後は雲竹斎の話の聞いてくれなくなるに違いない。ここがつらいところである。